

東宝

《カラー作品》
パナビジョン

愛ふたたび

ルノー・ベルレー / 浅丘ルリ子・主演
監督 ■ 市川 崑
脚本 ■ 谷川俊太郎 / 製作 ■ 藤本真澄・安武 竜
主題曲 ■ 浜口庫之助



ヒビキ
みゆき座 次回ロードショー

サヨナラをいうために あの人はパリからやって来た
サヨナラをいうたびに ふたりの愛はもえあがる——



みゆき座ロードショー公開
100本記念作品

POURQUOI.....

ものがたり

ニコとみやが出逢って、そして別れたのはパリ。そんなに昔のことではない。遠い日本に去ってしまったみやをニコはいまだに忘れられずにいた。

みやは美しい女性だった。日本の古都金沢にある古い薬屋の娘で、フランス語を勉強しにパリに来たのだが、ニコと愛を交すようになってすぐ、母親が病気になったため日本へ帰ってしまっていた。パリでの別れの日、ちょっとした言葉の違いから「さよなら」すら伝えなかったことをニコはずっと気にしていた。だから、東京で開かれるレーザー光線のセミナーに技師の1人として出席出来ると決った時、ニコの心はセミナーのことよりもふたたびみやに会える喜びでいっぱいだった。

金沢のみやの家へニコが訪ねて来た。その時みやはずで

に医学生と婚約していたが突然姿をあらわしたニコに、ときめく心を隠せなかった。「さよならを云いに来たんだよ」とニコは云う。

東京へ着くとすぐ、ホテルに荷物を放り出してニコはやって来たらしい。金沢がこんなに遠いとも知らず、教えられたとおり汽車に乗って。みやはそんなニコの気持ちが嬉しくほほえましかった。

それにしてもニコはあわてすぎたようだ。宿舎のホテルの名前も全く忘れて、ただみやに会いたい一心で金沢までとんで来た。言葉の通わぬ広い東京で、名前も知らないホテルをニコはどうやって探すのだろう。みやはニコのために東京へ一緒に行つてあげなければと考えた。

日本人のみやにとってさえニコのホテルを探すのは容易でなかった。東京中を歩きまわって日が暮れて、それでもニコのホテルは見つからない。ニコはただみやに頼りきつ



て、うれしそうにくっついて来る。みやは東京にいるフランス人の友達マリアのアパートへ一晩泊る決心をした。

翌日、やっとホテルを探し当てた時みやはこれで本当の別れが来たと思った。ひとり金沢に帰ってニコを思うと心は残るが別れなければならない二人であることに変わりなかった。東京のマリアから赤倉でスキーをしないかと誘いがあった時、一も二もなく応じたのは白銀にニコの面影を忘れようとしたのかも知れない。

赤倉にみやが着いた時、思いがけなくニコがいた。ニコもマリアに誘われたのだと云う。「こんなに別れに苦しんでいるのに」とみやは再びニコに出会ってしまったことがむしろ悲しかった。しかし会えばふたりはもえた。その夜、ロッジの一室でふたりは愛をたしかめつつ、語りつきない一夜を過した。

朝が来て、みやが黙って消えたことを知ったニコは、車

を借りて金沢へ走った。しかし金沢にもみやは居ない。

その頃みやは、セミナーの一行が泊っているホテルにニコの上司を訪ねていた。国籍の違う二人が愛し合ってみたところで、それはニコの将来を駄目にするだけだとみやは思う。私は日本を捨てられないし、ニコもまた日本では生きられない。それは分っているはずなのに、会えば心が燃えるだけ。ニコに冷静になるように説得して下さいとみやは頼んでいた。

ニコがパリに帰る別れの時がやって来た。自分の心を納得させた二人は空港で本当の別れを交した。飛行機が飛び立った。その時になってはじめてみやはニコを求めて走った。とり返しをつかない別れがみやをゲートの入口へ走らせていた。同じ瞬間、ニコも飛行機のクラップから身をひるがえして、みやを求めてゲートへと走っていた。



パナビジョン
《カラー作品》

東宝

愛ふたたび

ルノー・ベルレー／浅丘ルリ子

愛の哀しさ、美しさがパリに東京に展開する—

スタッフ

製作……………藤本真澄
安武 竜
脚本……………谷川俊太郎
監督……………市川 崑

キャスト

ニコ……………ルノー・ベルレー
みや……………浅丘ルリ子
マリア……………グラシエラ・ロベス・コロンブス
キーちゃん(マリアの友人)……………石立鉄男
みやの父……………宮口精二
" 母……………由起艶子
" 妹……………桃井かほり

かいせつ

ニコというフランス青年と美しい日本女性みやとの愛の物語りです。おたがいに心惹かれながら、別れよう、別れようとしている若い二人。燃えあがり、冷静になり、そしてまた愛の炎をもやしては苦しむ男と女。この映画の220をこえるシーンはふたりの愛の姿を追いつづけます。

東京—パリ—古都金沢。美しい映像と美しい音楽。そして愛の会話。フランスの人気俳優ルノー・ベルレーと浅丘ルリ子の情感あふれる愛のかたちが全篇に流れて感動的なラスト・シーンを盛り上げます。

合作というかたちでなく、海外のトップスターを招いて、8週間もの間日本ロケを展開、さらにパリに渡って撮影を行いました。監督は「東京オリンピック」で世界的に知られる市川崑。脚本は詩人として有名な谷川俊太郎です。